

新留学生オリエンテーション

2021年度、新留学生出発前

ガイダンス・オリエンテーションを開催

サセックス大学/
サセックス大学日本同窓会共催

6月26日(土) 17時~20時、2021年度、新留学生出発前ガイダンス・オリエンテーションを、サセックス大学とサセックス大学日本同窓会(以下「同窓会」)の共催で開催しました。昨年同様、Zoom方式の開催となり、サセックス大学からは、国際担当官James Minhas氏(香港、日本、韓国、台湾担当)とサセックス大学日本事務所の城戸一輝氏が参加。同窓会からは藤村建夫、高瀬千賀子、関根真杜の3氏が参加すると共に、現在留学中の田島真理恵氏が参加して、最新の情報を提供していただきました。留学生は47名の参加登録があり、昨年の35名より15名増加しました。

もともとサセックス大学は「公式の出発前ガイダンス」を行っており、他方、同窓会は独自に編集したハンドブックを使ってオリエンテーションを行っていましたが、昨年から、どちらもZoomを用いての開催となった為、情報の共有や留学生の便宜を図るため、共催として行うようになったものです。最初の1時間はサセックス大学から新留学生に対する「公式の出発前ガイダンス」として、Minhas氏と城戸氏が大学のパワーポイント資料を用いて行ないました。このガイダンスは、英語で行われ、現状を踏まえた現在の新型コロナウイルス感染症の状況や英国への入国の為の必要事項、入学手続きなどを、学生からの質問も受けつつ、1時間にわたり丁寧に説明しました。

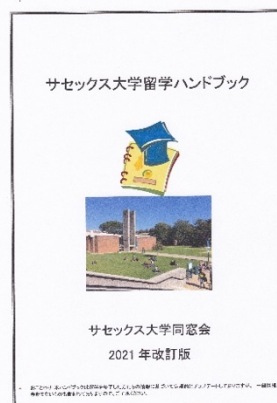
続いて、同窓会のオリエンテーションでは、「2021年版、サセックス大学留学生ハンドブック」をベースに前述の同窓会会員3人と留学生1人が講師となり、サセックス大学へ留学するにあたり、「準備すべきこと」及び「事

前に知っておくと良いこと」をハンドブックの主要項目に従って説明しました。この「サセックス大学留学生ハンドブック」は、毎年、同窓会が事前に留学中の皆さんの協力を得て、情報の最新化を図って作成しているもので、このセッションは日本語で行われました。

講師にはなるべく最近の卒業生になってもらい新しい情報を伝えたいと思っておりますが、今年はたまたま都合のつかない人が多かったため、Zoom開催のメリットを活かして、現役留学生の田島氏に協力を頂けたことは非常に有益でした。また、情報としては、大学が使った資料とハンドブックとで重複している箇所もありますが、なるべく現状にあった情報を届けることに留意しました。新留学生からは、特に最初に直面する「空港から大学への交通」に関する正確な情報の関心が高く、その部分の情報をまとめて欲しいとの要望が出た為、大学が使った資料と同窓会からの経験による情報などを一つに纏めて編集し、後日、参加者に送付してもらいました。

ハンドブックの改訂段階から現役留学生に参加して頂

いて情報のアップデートを心掛けていますが、Zoom開催により、オリエンテーションでもその繋がりができたことは、今後の開催の為の準備にも大きな利点を得られたように思われます。この開催には、新留学生への連絡に関し



て個人情報管理の観点からも大学を通して行わなければならない、この様に同時開催できた事は、参加者にとっても利点が大きかったのではないかと思います。(高瀬記)

Alumni Now!

藤原実紀

MA Poverty and Development: 2015年卒

サセックス大学での大学生生活

大学卒業後、3年半に及んだ外資系航空会社での客室乗務員としての経験においては、将来的には開発業界でのキャリア形成を見据えていたこともあり、アフリカを中心に公私含め約30カ国の途上国を訪れ現地でボランティアをするなど、現地の人々の生活を垣間見る機会がありました。途上国への知見が深まるにつれ、学術的に開発を学びたいという意欲が高まり、一念発起し、世界を代表する開発学の研究機関であり、特に途上国の貧困の中心にいる人々に焦点を当てたボトムアップアプローチの研究で有名と聞いていたサセックス大学院の英国開発研究所（IDS）への進学を決断しました。

貧困・開発学を専攻し、貧困課題について、その原因や構造及び解決策を開発経済と多領域の研究成果を踏まえて実践的に学びました。特に、貧困削減や食糧不安に脆弱な人々の自立支援（Resilience Building）を目的とした社会保障を実際に立案してみるという授業では、貧困層に対して適切な社会保障を提供するためには、どのような裨益者の選定（Target）方法、配布物、配布条件等が必要かを考慮しながら、同分野で経験豊富なクラスメイトたちと意見を出し合う過程で、多くの学びがありました。

また貧困層の中でも「最貧困層」については、その生活環境や財政的制約によって開発支援の効果が出づらい故、多くの支援機関が開発支援を好まないという事実を知り、最貧困層への自立支援に関わりたいという気持ちが強くなりました。担当教授の研究助手として、卒業論文のテーマでもあった最貧困層に対しての自立支援プログラムに関する評価レポートの分析に関わったことは非常に貴重な経験でした。

現場で生かされている大学での経験

2015年の大学院卒業後、まずは国内で国連機関の駐日事務所にて広報業務やイベント運営補佐のインターン生、および外務省国際協力局にてアフリカの経済協力支援計画の立案および実施調整を担当する経済協力専門員を経験しました。IDSにおいて、開発業界での経験が豊富な同級生と共に、既にプロジェクトの案件形成について学んでいたことは、非常に役立ちました。2017年以降は現場経験として、WFPマラウイ国事務所にて青年海外協力隊員としてモニタリング評価および最貧困層に対するResilience building支援に関する業務を担当し、その後、2019年には同WFPミャンマー事務所にJPOとして赴任し、緊急援助支援に関するプログラムマネジメント業務を担当しました。IDSにおいてのフィールド中心の視点を得ていたこと、実際に関連支援の評価レポート作成に携わっていたことが現場経験にて特に活かされました。

WFPのミャンマー事務所での実務

JPOとして約2年の任期を経て、同WFPミャンマー事務所のパートナーシップユニット長として正規採用され、資金調達およびドナーリレーションを担当しています。主に現地の各国大使館や民間企業の担当者、WFP地域事務所、本部および各国リエゾンオフィスと連絡を取り合い、資金援助に関する交渉、調整を行っています。今年2月1日の軍によるクーデター後、ミャンマーの状況は急速に変化しており、すでに弱い立場に置かれていた脆弱な人々の生活にさらなる打撃を与えています。WFPは既存の貧困、新型コロナウイルス、継続中の政治危機の3つの影響により、今後、都市部を中心に最大340万人の人々が



飢餓に陥ると推計しています。ミャンマー全土でのニーズ拡大に伴いWFPも都市部を中心に支援拡大しており、追加の資金援助の必要性が急速に高まる中、無力感を感じる場面も多々ありますが、ミャンマーで最も脆弱な

人々への支援に関わっていることに大きな責任とやりがいを感じています。

日々の業務に忙殺され、時には本来の目的を見失ってしまうこともあります。IDSにおける途上国の人々の生活をより良いものになりたいと志す仲間たちとの学び、ポトムアップアプローチに焦点をあてた教授たちからの教えを思い出し、貧困の中心にいる人々の目線に立った支援の実現を常に心がけています。

同窓会会員と幹事募集のお知らせ

サセックス大学同窓会(日本)では、現在、同窓会会員と活動をリードしていく担当幹事を募集しています。同窓会幹事の担当していただきたい活動は以下のような内容です。ご相談に応じますので、可能な範囲でのご協力をお願いします。

総務、会計、ニューズレター、サセックス・サロン、パブ、大学フェア支援等

ご協力可能な方は総務担当の野田までご連絡ください。yusukenoda0803@gmail.com

編集後記

今回のニューズレターを担当しております2019年卒の関根真杜と申します。寄稿いただきました皆様には大変感謝をしております。コロナ禍ではありますが、オンラインを活用し、更なるサセックスのネットワークの活発化と同窓会会員の皆様に有益な情報の提供ができたらと思っております。ご意見や不明点がございましたら、お気軽にこちらのメールアドレス(makoz.kitchen@gmail.com)までご連絡ください。

新留学生オリエンテーション

開発問題のフレームワークとSDGsを開催

サセックス大学同窓会主催

6月25日のオリエンテーションに引き続き、これまでに「国際開発」に関連する課題について、正式な学問をしていない留学生を対象にして、「開発問題のフレームワークとSDGsについて」の特別講義を7月3日(土)に開催しました。13名から参加希望がありましたが、都合のつかない4名を除く、9名が参加し、16時から18時半に開催しました。



セミナーは藤村氏が「開発問題のフレームワーク」を、高瀬氏が「SDGsの概要」を行いました。続いて活発な質疑応答が行われ、これからの大学生活へ向かう新しいエネルギーが感じられました。恐らく、半年後くらいに大学院後の就職を考えるにあたり、何か同窓会としても現役留学生を対象にセミナーまたは交流会のようなものを企画できると良いと思われれます。COVID-19の影響で実際に会って話すという機会は少なくなりましたが、Zoomなどを利用した遠隔のコミュニケーションが定着してきているので、今後もこの様な形式を活用して、留学生への支援を継続できたら良いと思われれます。(高瀬記)